

豹と私

大村伸一

いくつかの大きな建物には豹がすんでいた。豹のいる建物であれば、通りに面した扉の下の端から獣の体毛がはみ出ている。尻尾の先端から一房抜け落ちたもののようで硬く焦げたにおいもする。建物は高く上の方は街灯が壊れており、闇に隠されたあたりでは、小さな光る点が幾つも輝いている。それは星ではなく豹の目に違いなく、こちらから見られていると気づいているのだろう時々瞬いている。煉瓦で作られた道は真夜中になっても熱を残し、通り過ぎる酔っぱらいが唾を吐くと道に当たったとたん唾は音を立てて蒸発する。蒸発した唾のにおいに気づいた豹は決して酔っぱらいに興味があるようなそぶりは見せないが、そんな酔っぱらいが朝を迎えることは決してない。月のない夜が幾夜も続いている。どの建物も屋根のすぐ下に洗面器が並べて吊り下げられ、空にならないように水が継ぎ足し張られている。夜になり月がどこかに現れると、すぐにどれかの洗面器の水に吸い込まれ、月は空から消えるのだという。それが真実なら鳥や蝶も空から消えてしまうはずだが、そんな話は噂にもなっていない。中には月などもともとありはしなかったのだと言う者もいて、老人たちの失笑を買う。月がなければ虫はどこで生まれるというのだろう。虫を食べる鳥はどこで生まれるというのだろう。豹が決して屋根の上に上がらないのは、やはり洗面器に張られた水のせいなのだろう。水に吸い込まれるという迷信を豹が怖れるとは思えないから、あるいは豹は月のない夜空には興味がないのかもしれない。煉瓦道は硬く、豹が足音を立てず足跡も残さずに歩き回るのが適している。年寄りの中には足音を立てずに歩き回ることを無作法だと言ひ舌打ちすらする者もいるが、そんなことを言う者は稀だ。豹は犬と違い道ばたに糞を残したり、人前で交尾をしたりすることがないからだ。大きな建物にすむ豹は、乞われればわざと煉瓦の上に足跡を残してくれることもあるが、そうでなければまるで豹はどこにも存在しないかのようだ。建物はすべて煉瓦造りであり、煉瓦と煉瓦の隙間に豹の爪を混ぜて詰めれば壁は大砲でさえ破壊できなくなると言われている。爪を切る時、豹はうっとり目を閉じ喉を鳴らし続ける。よほど満腹していなければ、そんなふうに爪を切らせたりはしない。深夜にはいくつかの大きな建物の入り口の扉が開かれ招待された客の訪れを待っている。豹は建物の奥の暗がりの中で気づかれないほどに浅い息をして誰かが来るのを待っているだろう。扉の中に入れば床からも家具からも腐りかけた動物の肉のにおいがする。豹が好んで建物をそんなにおいに行っているのか、豹の食習慣によって豹のすむ建物ではどうしてもそのにおいがするのか。扉を入った者の心に浮かぶ疑問である。暗闇の中では歓迎の言葉と抱擁のかわりに喉に溢れる泡音と熱い吐息に包まれることになる。

「おまえはなにものであるか」

豹にそんなことを尋ねられるとは思ってもいなかった。豹がそんな無意味な質問をするわけではないのだが、いかにも豹が知りたがりそうな質問だった。暗闇の中で豹を目の前にしてその質問の答えを見出すことは難しい。豹の姿が見えなければなおさらだ。答をみつけられずにいると、やがて豹は私を確かめるために近づき、一度、鼻を鳴らしただけでいかにも興味なさそうに遠ざかる。そのとき、腐った動物の肉のにおいがした。豹の尻尾が顔の前を通過したのだろう。昔は建物だけでなく豹自身もそんなにおいをさせていたことを、そのとき思い出した。そして、その腐ったにおいをさせている肉は、他にもない肉食獣の肉でしかありえないということも思い出した。つまり、その豹はまぎれもなく黒豹だということだ。黒豹はただ黒いだけではなく大きくひととき凶暴で、他の豹さえ餌食にしてしまう。そして黒豹が人の言葉を使えないことも思い出した。その瞬間、背中を向けていた黒豹が紙を裏返すようにのけぞり、大きな口を開けて私の首にかぶりついた。牙は喉を突き抜けて首の後ろから突き出した。首が折れてしまったらしく、私は二度と息ができなかった。

「おまえはなにものであるか」

黒豹が話したように聞こえていたのが本当は何だったのか、消えてゆく意識の中で私は確かに知っていたが、それを誰にも伝えることはできなかった。